

## 第11章 登山の歴史と文学

山に向けた人間の畏敬の念は、ごく自然の成り行きであり、そこからいつしか山岳信仰が生まれるようになった。

日本の山は、岩山で氷河のあるアルプスとは違い、古代から行を積む修験者や木地師、猟師らの生活の場であった。江戸時代中期には各地の霊山で講中登山が行われるなど、日本人は古くから山と親しんできた。明治維新以降外国人の来日により、外国人の目で見た日本の山が紹介されるようになる。大正時代になると日本人がアルプスで本格的に登山するようになり、岩・氷を登る近代登山が日本にもたらされる。やがてより高くより困難な思いは、ヒマラヤの高峰を目指すようになった。終戦後は、登山の大衆化が進み、先鋭的なクライマーはバリエーションルートを開拓する。海外渡航が自由化されると満を持した日本人は、アルプスやヒマラヤへと繰り出す。日本の高度経済成長に後押しされ、夥しい数の登山隊が数々の記録を遺した。しかし、バブル経済の破綻とともに日本人の海外登山は、激減した。それでも先鋭的なアルピニズムは継続され驚異的なハード・クライムがヒマラヤ等で実践されている。

### 1 山岳宗教と登山

国土の7割が山地のわが国では、古くから人々は山と深く、さまざまに関わりながら生活してきた。

山はまず、人々の信仰の対象となった。仰ぎ見る山々は荘厳な美しさで、畏敬の念を抱かせ、山体そのものが神となった。山は、神・霊・物の怪が宿る聖なる地として崇拜され、神との一体化を求めて山中で行を積む修験者は、仏教伝来以前から見られた。

6世紀に仏教や道教が伝来すると原始的な山岳信仰は、その影響を受け、教理と体制を整えていった。

7世紀、役の行者・小角（おづぬ）が葛城山に修験道を開き、8～9世紀になると山を仏教修行の場として、最澄が比叡山で天台宗を、空海が高野山で真言宗を興す。

この時代、701（大宝元）年に立山（佐伯宿禰有若）、717（養老元）年に白山（泰澄大師）、774（宝亀5）年に木曾御嶽山（石川朝臣（望足））、782（天応2）年に男体山（勝道上人）などの開山伝説が遺る。

戦国時代の動乱期には戦略上の必要から山岳の要路がその舞台に登場する。信州の大門峠、飛騨の安房峠、越中のザラ峠などがとくに有名である。

1584（天正12）年11月、越中富山の城主佐々成政は、浜松城の徳川家康を訪ねるため、新雪のザラ峠を雪中強行突破した。

徳川時代、幕府や各藩は山林の管理保護に力を注いだ。山岳地帯に領地を持つ加賀、松本、尾張、高遠、飛騨などの各藩は、山奉行、あるいは郡奉行を設け、その下に山廻りを置き、盗伐の監視、幕命・藩命による木材伐出、造林作業の指導・監視などを行った。加賀藩の黒部奥山廻り役は、1640（寛永17）年以來、黒部川流域で国境警備と森林保護に当たり、立山～針ノ木峠～鹿島槍～白馬、野口五郎～三俣蓮華～薬師

岳を結ぶ尾根や谷が細かく踏査され、記録に遺した。

江戸時代中期（18～19世紀）になると、笠ヶ岳（1783（天明3）年・南裔上人、1823（文政6）年・播隆上人）、甲斐駒ヶ岳（1816（文化13）年・弘幡（延命）行者）、槍ヶ岳（1828（文政11）年・播隆上人）などが相次いで開山される。一方、富士山、立山、白山、出羽三山、木曾御嶽山、相模大山などの山岳信仰の霊場では、「講」を組織して登拝を勧める講中登山が全国に及び、宗派を超えた老若男女で賑わいを見せる。

一方、アルプスでは1786（天明6）年8月8日にシャモニー在住の医師 M.G. パカールと水晶採りの J. バルマがフランス側からアルプスの最高峰、モン・ブラン（4,807m）に初登頂。この初登頂をもって近代登山の幕開けとされる。

### 2 近代登山の黎明

1854（嘉永7）年、徳川幕府が鎖国政策を転換して開国に踏み切ると、日本の山に外国人の足跡が及ぶようになり、近代登山の黎明期を迎える。

外国人の本邦初登山は、1860（万延元）年の初代イギリス公使ラザフォード・オルコックらの富士山登頂。来日する外国人にとって富士山は憧れだったようで、その後も外国人の富士山登頂は急増し、1875（明治8）年までに女性3人を含めて100人以上に達したと伝えられる。

1877（明治10）年前後から文明開化・殖産興業の指南役に招かれた外国人の科学者や技術者による登山活動が各地でみられるようになる。彼らの中には、山岳をフィールドに採集・調査・観測などの専門家のほか職掌を超えて探検登山やレクリエーション登山を楽しむ者も少なくなかった。

イギリス外交官のアーネスト・M・サトウは、1862（文久2）年に初来日し、維新期の日本を東奔西走し、

明治新政府の安定統治に尽力する。一方、各地を精力的に旅行し、山に登った。サトウは自らの日本行脚と日本研究を集成し、A.G.S.ハウスと共に在日・来日外国人のために『日本旅行案内』を編んだ。因みに植物学者で「尾瀬の父」と云われ、後年、日本山岳会や日本山岳協会の会長を務めた武田久吉はサトウの子息である。

イギリス人で冶金技師のウイリアム・ガウランドは、1872（明治5）年～88（明治21）年にかけて大阪造幣局に招かれて各地鉱山を巡視。その傍ら中部山岳地帯に親しみ、1873（明治6）年に御嶽山、75（明治8）年に立山、77（明治10）年に乗鞍岳、槍ヶ岳などに登頂して、初めて「日本アルプス」の呼称を用いた。

これら来日外国人の許や欧米への留学などで、山岳をフィールドとする近代科学を学んだ日本人科学者が養成された。彼らは、政府機関や大学などで専門分野の調査・研究を進め、後進の育成に当たった。

1888（明治21）年、原田豊吉はドイツ留学後、中部山岳地帯を分類して飛騨山脈、木曾山脈、美濃飛騨高原と命名。

1904（明治37）年、山崎直方は、薬師岳や立山などでカール地形を発見。立山・雄山西面に「山崎カール」の名を遺す。

1884（明治17）年、内務省、陸軍などがそれぞれ進めていた地図作成の測量を陸軍参謀本部測量局（後の陸地測量部）に統合。その前後から測量師らは一等三角点設置目標の高峰に登って測量作業に当たった。1879（明治12）年の赤石岳が最も早く、1900年代初頭には飛騨・赤石・木曾山脈の殆どで測量登山が行われた。新田次郎の小説『劔岳点の記』で知られる柴崎芳太郎一行による劔岳測量は、1907（明治40）年7月のことである。

一方、野中到は、高山に気象観測所を常設する必要性を強く主張し、1895（明治28）年に富士山頂に観測所を設けて越冬覚悟で観測に当たる。10月1日から観測を開始。10日後に妻・千代子も加わり、観測を続けるも高山病に倒れ、越冬前の師走に救出される。

### 3 近代登山の揺籃

1854（嘉永7）年、徳川幕府が開国に踏み切った頃、本場アルプスでは、A. ウイルスのヴェッターホルン初登頂を契機にアルプス未踏の高峰を目指す「黄金時代」の登山活動が始まる。英国では1857（安政4）年に「The Alpine Club」（英国山岳会）が設立。1865（慶応元）年にはE. ウィンパーが難峰マッターホルンを初登頂。

「黄金時代」後のアルプスでは、A.F. ママリナーら前衛アルピニストが未踏ルートを求め、より困難で冒険

的な登攀やガイドレス登山が展開されるようになる。

このような時代にアルプスで登山を体得したウォルター・ウェストンが1888（明治21）年4月に来日する。イギリス人牧師のウェストンは、日本の高山の開拓者であり、探究者でもあった。1890（明治23）年の富士山、祖母山を皮切りに翌91（明治24）年から日本アルプスを中心に本格的な登山活動を開始する。1894（明治27）年10月までの第1回滞日中の足跡は、御嶽山、木曾駒ヶ岳、富士宝永山、乗鞍岳、槍ヶ岳、赤石岳、恵那山、針ノ木～黒部川～平～ザラ峠～立山、笠ヶ岳、前穂高岳、白馬岳、常念山などに及ぶ。1896（明治29）年にこれらの登山活動と日本研究を纏めた『日本アルプス—登山と探検』をロンドンで刊行。

ウェストンの第2回滞日は、1902（明治35）年6月～06（明治39）年3月で、02年には富士山、北岳で登山を再開。03（明治36）年には甲斐駒ヶ岳、04（明治37）年には金峰山、鳳凰山地蔵岳のオベリスク初登攀、北岳、間ノ岳、仙丈ヶ岳、富士山、戸隠岳、八ヶ岳などに登頂。

この時期に岡野金次郎や小島烏水ら日本人近代登山の先駆者となる人々との交流が始まり、日本山岳会の設立に繋がっていく。

ウェストンの第1回滞日に前後して、日清開戦に湧き立つ1894（明治27）年、地質学者の志賀重昂が『日本風景論』の名著を纏め上げ、ベストセラーとなる。この書がウェストンの『日本アルプス—登山と探検』とともに近代登山に与えた影響は大きく、ウェストンと志賀が近代登山興隆の祖と云われる所以である。

1902（明治35）年8月、小島烏水と岡野金次郎は槍ヶ岳に登頂。その直後、偶然にも岡野が『日本アルプス—登山と探検』に出会い、槍ヶ岳の写真と登山記事を見つかる。しかも著者のウェストン宅が横浜にあることを知り、手紙を送ったのが契機となり交流が始まる。

ウェストンは、小島らに日本での山岳会設立を勧めて帰国。その後、小島らはウェストンのアドバイスを受け、越後の豪農、高頭式（仁兵衛）らの尽力もあって1905（明治38）年に日本初の山岳会を設立する。

すでに日本国内の多くの山々は、宗教的には開山されており、地図作成の測量登山も進んでいた。だが志賀によって愛山の念を鼓舞され、日本山岳会の発足を知って登山を志す都会の若者にとって、山は未知の領域だった。日本アルプスを中心に谷から峰、峰から峰へとルートを開く、探検登山が展開され、日本アルプス黄金時代を迎える。日本山岳会設立の前後から10年余、大正初期までがそのピークを成す。

日本山岳会の草創期会員たちによる中部山岳地帯の探検登山が一段落したころ、各大学、高等学校に相次いで設立された山岳部の活躍は、日本の登山史に新し

いページを次々と書き加えていった。雪と氷と岩を対象とする新しいアルプス的な登山が、国内の山々で本格的に開始されたのである。1907（明治40）年北大スキー部、13（大正2）年一高旅行部、三高山岳会、20（大正9）年二高山岳会、21（大正10）年慶應義塾大学山岳会、25（大正14）年学習院輔人会山岳部、26（大正15）年早稲田大学山岳会と学生山岳団体が生まれた。大正の末期には当時の大学、高専の殆どに学生山岳団体が設立された。

一方、一般の登山愛好者の組織も生まれる。1908（明治41）年8月には飛騨山岳会、09（明治42）年、名古屋愛山会、13（大正2）年、山梨山岳会、19（大正8）年に信濃山岳会や霧の旅会などが設立された。関西では1910（明治43）年に神戸草鞋会が設立され、13（大正2）年に神戸徒歩会（KWS）と改称する。

この時代、既に積雪期登山も一部では行われていたが、スキー技術の伝来によって積雪期登山の幅が広がっていった。1911（明治44）年1月、オーストリア陸軍のT.V.レルヒ少佐が高田師団歩兵第58連隊でスキー技術を伝授。スキー登山は、先ずレルヒの門下生によって1913（大正2）年、富士山で行われる。その後、北アルプスの立山、剣岳、白馬岳、燕岳、槍ヶ岳、穂高岳、南アルプスの北岳、北海道の大雪山・日高山系などで急速な勢いでスキーを雪山の歩行具とする登山活動が活発となった。

#### 4 アルピニズムの勃興

アルプスに於ける日本人の本格的登山は、大正の中期から活発の度を加える。

1921（大正10）年、日高信六郎は、モン・ブラン（4,807m）に日本人初登頂を成す。

同年9月、楨有恒がアイガー東山稜を初登攀した。この快挙は、既により困難な岩稜、岩壁に挑戦する「鉄の時代」を迎えていたアルプスの登山史上からみても、輝かしい記録であった。またこれは日本の登山界にとっても新しい局面を迎える深い意義を持つ登攀ともなった。

当時、国内でも岩稜を登降する登山は行われていた。1920（大正9）年7月、信濃山岳会の土橋荘三らが小林喜作の案内で、槍ヶ岳北鎌尾根を初めて縦走（下降）した。22（大正11）年には学習院大学山岳部の板倉勝宣、松方三郎、伊集院虎一らが喜作の案内で天上沢から北鎌尾根に取り付き、槍ヶ岳に登頂。同日、早稲田大学山岳部の舟田三郎、麻生武治は槍頂上から北鎌尾根を2,907m迄下り、頂上へ登り返した。

1921（大正10）年暮れに帰朝した楨は、翌22（大正11）年3月、慶應山岳部の後輩と学習院山岳部の合同パーティで積雪期の槍ヶ岳登頂を果たす。この積

雪期登山は、早稲田の舟田、麻生、小笠原勇八らを奮い立たせ、舟田らは24（大正13）年1月により困難な厳冬期の槍ヶ岳登頂を果たす。積雪期から厳冬期、冬季登頂から冬季縦走へとより困難な山行を目指す学校山岳部の活動が熱を帯びてくる。

一方、1924（大正13）年6月、藤木九三、榎谷徹蔵、水野祥太郎、津田周二、中村勝郎らが神戸にロック・クライミング・クラブ（RCC）を設立。神戸徒歩会の会員を中心メンバーとしたこのRCCは、日本初の岩登りと雪山登山を専門とした社会人山岳会である。翌25（大正14）年に藤木は日本初のロック・クライミング技術解説書『岩登り術』を著し、同年8月に北穂高滝谷の初登攀を成す。

こうして、時代が昭和に入ると社会人登山も盛んになる。1930（昭和5）年に山岳雑誌『山と溪谷』が創刊され、相次いで『山と旅』、『山小屋』、『ハイキング』などが発刊されると燎原の火の如き勢いで全国に登山熱を煽り立てた。各地に山岳会が誕生したのは、こうしたマスコミの発達が背景にあった。

東京では1929（昭和4）年に武蔵山岳会ができると明峰山岳会、日本登高会、登歩渓流会などの山岳会が相次いだ。

1930（昭和5）年頃になると若いクライマーたちは、さらに困難な登攀、挑戦的な積雪期登山を志向するようになり、本格的なバリエーション時代へと突入する。

1930（昭和5）年8月、剣岳チンネ左稜線上部を弱冠18歳の山埜三郎（RCC）が初登攀。

小川登喜男は、翌31（昭和6）年8月、穂高屏風岩1ルンゼ、2ルンゼを初登し、翌32（昭和7）年4月には単独で剣岳八ツ峰と源次郎尾根の積雪期初登。

1932（昭和7）年から34（昭和9）年にかけては早大山岳部の出生陽太郎、今井友之助、折井健一、小川猛男（登喜男の弟）らが北穂高谷の積雪期登攀に取り組み、第2、第3、第4尾根を積雪期初登。その先鋭的精神は次世代にも踏襲され、36（昭和11）年1月には小西宗明、村田愿が鹿島槍北壁主稜、同年3月には青木茂雄らによる剣岳池ノ谷・剣尾根の積雪期初登攀が成された。

当時、冬期登攀を果敢に実践したのは、早大とともに東京商大（現・一橋大）の小谷部全助らであった。小谷部らは35（昭和10）年6月、北岳バットレス第4尾根の直登に成功すると、36（昭和11）年9月には第1尾根を初登。翌37（昭和12）年1月には第1、第4尾根の冬季初登を果たす。そして同年3月には小谷部と森川眞三郎が鹿島槍荒沢奥壁北稜も拓く。

本場アルプスでアイガー北壁の初登攀（1938年）が成される以前に、自国に雪線を持たぬ我が国のクラ

イマーたちはより厳しい対象を求めて冬季登攀という日本独自の登攀形式を実践していたのである。

堀田弥一ら立教大学山岳部は、1930（昭和5）年3月から32（昭和7）年1月にかけて唐松岳～白馬岳、槍ヶ岳～奥穂高岳など主として積雪期の縦走登山に実力を発揮し、それらは1936（昭和11）年のナンダ・コット初登頂に結実する。

他にも明大、学習院大、関西学院大、とりわけ北大などが優れた積雪期縦走を果たす。

これら大学山岳部が活躍する中、社会人登山者の加藤文太郎はたった一人で、1931（昭和6）年1月、薬師岳～三俣蓮華岳～烏帽子岳、32（昭和7）年2月、槍ヶ岳～笠ヶ岳往復、33（昭和8）年3月、槍ヶ岳～前穂高岳等の縦走を完遂するなど大学山岳部の成果に勝るとも劣らない業績を印した。加藤は、1936（昭和11）年1月、槍ヶ岳北鎌尾根に死す。

## 5 社会人山岳会と登山の大衆化

上越の谷川岳は2,000mにも満たぬ山であるが、穂高、剣と並んで本格的クライミングの発祥の地である。クライミングのエポックメイキング的な出来事は、そのほとんどが、他の山域に先駆けて一ノ倉沢等で行われた。

この谷川岳を「近くてよい山なり」と世に紹介したのは慶應の大島亮吉である。1926（大正15）年10月、成蹊高校の成瀬岩雄と奥利根に赴き、上州武尊山から谷川岳を遠望して、東面の岩壁群に驚く。翌27（昭和2）年には一ノ倉沢、幽ノ沢を試登し、マチガ沢を完登する。しかし、大島は翌28（昭和3）年3月に前穂高岳北尾根に逝き、大島の遺志は小川登喜男らに引き継がれる。

1930（昭和5）年7月、青山学院の小島隼太郎（小島烏水の長男）らは谷川岳一ノ倉沢二ノ沢左俣を初登攀。同7月には小川登喜男が一ノ倉沢三ルンゼを初登攀。

小川は、翌31（昭和6）年7月は幽ノ沢を初登。32（昭和7）年2月には東尾根から一ノ倉岳へ縦走して一ノ倉尾根を下降。

1931（昭和6）年、清水トンネルが全通すると、谷川岳は夜行日帰り可能な山となった。こうした中、谷川岳の岩壁に邁進したのは、登歩渓流会をはじめとする首都圏の社会人山岳会であった。

登歩渓流会の山口清秀は、32（昭和7）年、一ノ倉沢奥壁及び二ノ沢左俣を単独初登攀。同じく会を主導した杉本光作は、34（昭和9）年に幽ノ沢左俣滝沢、一ノ倉沢二ノ沢本谷、二ノ沢右俣などを初登。

登歩渓流会と云えば中学生で入会した松濤明は、1939（昭和14）年12月、17歳で北穂滝谷第1尾根の

積雪期初登を果たすなど若くして先鋭的な登攀を実践するも1949（昭和24）年1月、有元克己と槍ヶ岳北鎌尾根を縦走中に遭難し、名著『風雪のビバーク』を遺す。

当時のクライマーにとって谷川岳一ノ倉沢の至上の岩壁だった滝沢下部は、1939（昭和14）年9月、慶應の平田恭助と北アのガイド浅川勇夫によって初登された。その平田は翌40（昭和15）年5月に一ノ倉沢で遭難。「近くてよい山」ということで登山者が押し掛けるようになると遭難事故も急増し、この頃より「魔の山」と呼ばれるようになる。

1945（昭和20）年8月に終戦を迎えると、まもなく『山と渓谷』（1946年復刊）や『岳人』（1947年創刊）が相次いで出版され、戦後の焼き野原に登山文化が蠢き出す。戦前（1942年3月）、屏風岩1ルンゼの冬季初登を果たした新村正一（関西登高会）らは1947（昭和22）年3月、剣岳から槍ヶ岳へ縦走する快挙を成し、同年7月には石岡繁雄らが屏風岩に挑む。また、同年12月から48（昭和23）年1月にかけて小島六郎らの早大隊は、日高山脈のペテガリ岳東尾根を初登するなど登山は復活する。

そして1950（昭和25）年に朝鮮戦争が勃発し、いわゆる特需の恩恵を受ける。これによって戦後復興が加速され、人々の暮らしには余裕が生まれ、山にも行きやすくなってきた。

1956（昭和31）年、「経済白書」は「戦後」の終焉を告げ、同年2月には第7回冬季五輪で猪谷千春が男子回転で銀メダルを獲得、5月には日本隊のマナスル初登頂の快挙、とスポーツでも世界に伍すようになった。マナスル初登頂の記録映画『マナスルに立つ』は全国で上映され、どの映画館も長蛇の列を作る盛況ぶりであった。また、井上靖の小説『氷壁』が新聞連載され、スペンサー・トレーシーの『山』の封切りなどが拍車をかけ、空前の大衆登山ブームが起こる。この登山ブームは、市井の社会人や職域の山岳会を雨後の筍のように創設させ、「3人寄れば山岳会」と云われた。これらの山岳会の多くは他会員との山行を禁じ、セクト的な閉鎖性が顕著であった。

このような時代背景の元、第2次RCCが誕生する。戦中、一ノ倉沢に通い詰めた庶民派クライマーの奥山章は、セクトに捉われず、自由にアルピニズムを追求できる同人的な機構を夢想し、首都圏の有力山岳会のリーダーたちに働きかけ、1958（昭和33）年1月、第2次RCCを発足させた。1924（大正13）年に藤木九三らが創立したRCCの前衛精神を継承するとして、その名を第2次RCCとした。古川純一（ベルニナ山岳会）、芳野満彦（アルムクラブ）、吉尾弘（朝霧山岳会）、松本龍雄（雲表倶楽部）ら一匹狼的な現役クラ

イマーに加えて上田哲農、安川茂雄らオピニオンリーダーも参画した。基本的には実践団体ではなく研究・啓発を目的としたサロンの集まりであったが、第2次RCCの旗印の下で先鋭的な登攀も行われた。

同人らの登攀用具研究で埋込ボルトが開発されると1958(昭和33)6月、一ノ倉沢コップ状正面壁が松本龍雄らによって初登攀される。翌59(昭和34)年7月には東京雲稜会の南博人らが屏風岩東壁、同年8月には一ノ倉沢衝立岩正面壁を初登攀し、不可能神話を崩壊させた。以降、ピトンの打てない一枚岩の岩壁にもボルトが連打されるようになり、人工登攀の全盛を迎える。

一方、雪崩の脅威に支配される冬季ルンゼ登攀にアルピニズムの真髄を求めるクライマーも現れる。1960(昭和35)年2月、独標登高会の久間田芳雄と石井重胤は一ノ倉沢滝沢第1スラブを冬季初登。石井は、66(昭和41)年8月にグランド・ジョラス北壁の日本人初登攀者となる。

石井らが滝沢スラブを冬季初登した同年4月、全日本山岳連盟と日本山岳会が協力して日本山岳協会を創立し、登山界を統轄する中央競技団体として日本体育協会(現日本スポーツ協会)に加盟する。同年5月には勤労者山岳会(現日本勤労者山岳連盟)も創立される。

登山者の増加と共に遭難も続発した。『山男の歌』が大ヒットした1962(昭和37)年の正月4日間には全国で過去最悪の死者・行方不明者31名を記録。そして年末には北海道学芸大学函館分校山岳部のパーティ11名が遭難し、リーダーを除く10名が死亡。明けて正月早々には愛知大学山岳部員13名が薬師岳で遭難。翌1964(昭和39)年1月には大館鳳鳴高校の高校生4名が岩木山で遭難するなど学生らの悲劇が相次いだ。これらの遭難事故は、繰り返し新聞等のメディアで報道され、社会問題となった。

こうした背景の中で、山岳遭難事故を未然に防ぐには、優れた指導者(顧問等)の養成が急務として国立登山センター構想がまとまり、1967(昭和42)年に文部省登山研修所(現国立登山研修所)が設立される。

1960年代末から70年代に入ると谷川、穂高、劔の三大岩場以外の未開の岩壁に目を向けられ、新たなルートが拓かれていった。黒部丸山、別山、奥鐘山、明星山、海谷山塊、越後駒ヶ岳、唐沢岳、甲斐駒ヶ岳、大崩山群などで次々と夥しい数のバリエーションルートが拓かれた。これらの殆どは、社会人山岳会によって拓かれたが、中でも岡山クライマースクラブ、広島山の会、清水RCCなど地方都市の社会人山岳会の躍進が目立った。やがて彼らは、新たな困難を求めてアルプス、アンデス、ヒマラヤのビッグ・ウォールへと羽ばたいていくことになる。

一方、70年代初めにピオレトラクションの技術が伝わりと雪崩の脅威ゆえに登られてこなかったルンゼやスラブのルートが注視されるようになる。1973(昭和48)年3月、遠藤甲太が一ノ倉沢αルンゼをピオレトラクションによる登攀で積雪期単独初登。以降、ピオレトラクションによる登攀は、主として谷川岳東面のルンゼ、スラブで次々と展開されるようになる。細貝栄(八雲山の会)は、76(昭和51)年冬に谷川岳のルンゼを単独で5本も登った。

1979(昭和54)年1月、登攀クラブ蒼氷の富田雅昭が、奥鐘山西壁京都ルートを積雪期単独初登すると、同年12月には鈴木茂(群馬太田山岳会)が紫岳会ルート、翌80(昭和55)年1月には登攀クラブ蒼氷の横山忠(坪井忠雄)がOCC左ルートをそれぞれ積雪期単独初登して、冬季岩壁登攀史に節目となる記録を遺した。

また、1981(昭和56)年12月に日本登攀クラブの山上清人、倉田和憲が甲斐駒ヶ岳篠沢七丈ノ滝をピオレトラクションで登攀、これを機に全国的に氷瀑(パーティカル・アイス)登攀が広がった。

一方、70年代末から80年代にかけては、谷川岳や甲斐駒ヶ岳の既登ルートを1日で何本も継続するスピード登攀も行われるようになる。

## 6 中高年登山と商業登山

80年代末、戦後生まれの団塊の世代が40歳代を迎え、中高年登山ブームが起こる。会社での終着が見え出した頃から定年後の生き甲斐を考え、健康志向、有り余る時間の過ごし方、趣味探しなどの先に登山があった。この中高年登山者に深田久弥の『日本百名山』は恰好の目標となって「百名山ブーム」が起こった。2泊3日で3名山踏破などの弾丸ツアーもあってどの百名山も登山者で溢れるようになり、百名山以外の山は不遇を囲った。

この「百名山ブーム」では、ガイド登山を隆盛させ、登山者ではない登山客を作り出した。現在、中高年層の大半を占める自立しない登山客の遭難事故が多発しており、社会的な問題となっている。

日本に近代登山が勃興してほぼ1世紀半を経た。その昔、先鋭的なクライマーたちが岩と雪に若い命を賭したクラシック・ルートも、今では老若男女が何の気負いもなく出かけ、ゲレンデ感覚で登っている。人工登攀で登られた岩壁はフリー化され、素手のフリークライミング愛好者が登っている。

一方では、山をフィールドとする新たなスポーツとして、カモシカ山行を競技化したようなトレイルランニングやスカイランニングの愛好者が増え、各地で競技大会が開催されるようになり、山は登山者のためだけのものではなくなってきた。

## 7 海外登山

世界の屋根、ヒマラヤへの挑戦は、近代アルピニズムを生んだイギリス人を中心に、18世紀頃から始まり、1921(大正10)年にはエベレストにG.L.マロリーらの第1次登山隊が挑戦した。

因みに人類初の7,000m峰登山は、1907(明治40)年、英国のT.G.ロングスタッフのインド・ガルワールヒマラヤのトリスル(7,120m)初登頂である。

登山を目的にヒマラヤに最初に挑んだ日本人は鹿子木員信だ。彼は、1919(大正8)年にシッキムに入り、北部シッキムやタルン氷河を踏査し、カブール(4,810m)に登頂した。

日本最初の組織的な海外遠征隊は、1925(大正14)年に榎有恒隊長らが初登頂したカナディアン・ロッキーのアルバータ(3,619m)登山。

一方、大正末期から昭和初期にかけて日本人がアルプスで充実した登山記録を遺している。1928(昭和3)年、浦松佐美太郎がヴェッターホルン南西稜初登攀、翌29(昭和4)年、各務良幸はモン・モディ東南壁にカガミ・ルートを拓く。

北アの積雪期縦走などで実績を重ねた立教大学の堀田弥一らは、1936(昭和11)年、インド・ガルワールに聳えるナンダ・コット(6,861m)に向かい、見事初登頂の快挙を成す。戦前にヒマラヤに向かった我が国の登山隊は、このナンダ・コットが唯一無二で、我が国ヒマラヤ登山の嚆矢とされる。

第2次世界大戦後、ヒマラヤの北と南では大きな政治情勢の変化がみられた。北側のチベットは、共産革命が成った中国に併合されて、禁断の地となった。南では英領インドがインドと東西パキスタンに分離独立し、永らく鎖国を続けてきたネパール王国が開国に踏み切った。

1949(昭和24)年、ネパールが開国すると英国のH.W.ティルマンは、逸早く入国してランタン、ジュガール、ガネッシュの各山群を探った。同年6月、R.ディテールの率いるスイス隊は、シッキムとの国境に聳えるピラミッド・ピーク(パティバラ)北東峰に登頂。

翌50(昭和25)年にはモーリス・エルゾークの率いるフランス隊がアンナプルナI峰に登頂し、人類初の8,000m峰登頂を成す。

1951(昭和26)年、英国はE.シプトンの率いる偵察隊をエベレストに派遣し、クーンブ氷河からの登路を見出す。然しながら52(昭和27)年の登山許可は、スイス隊に与えられてしまう。スイス隊は、春、秋の2シーズン連続して挑戦して頂上に肉薄するも「大空の女神」の微笑は得られず、初登頂の榮譽は、翌53(昭

和28)年この山の先駆者である英国隊(J.ハント隊長)が手にすることになる。

この頃、日本でも京都大学学士山岳会(AACK)の今西錦司が「マナスルをやろう」と提唱。しかし、連合軍の占領下にあった日本では、登山許可を得ようにもネパールとの外交ルートすらなかった。

1952(昭和27)年1月、AACKの西堀栄三郎はインド学術会議出席の機にネパール入りを果たし、マナスルの登山許可申請を行う。そして5月には登山許可が交付された。その後、この計画は日本山岳会に移譲され、全日本規模で推進されることになった。

日本山岳会ではヒマラヤ委員会(榎有恒委員長)を立ち上げ、その年の秋に偵察隊(今西錦司隊長)を派遣することにした。偵察隊は、アンナプルナIV峰を攀登した後、マナスルの北東面に廻り、可能性のあるルートを見出した。

1953(昭和28)年、三田幸夫を隊長とする本隊を派遣。偵察隊の発見したルートを踏襲してアタックしたが7,500mで断念。

翌54(昭和29)年の第2次隊(堀田弥一隊長)は、山麓の集落、サマの住民の反対に遭ってマナスルを断念。ガネッシュ・ヒマールに転進を余儀なくされ、帰国した。

1956(昭和31)年の第3次隊は、隊長に榎有恒を迎え、背水の陣で臨んだ。登山は首尾よく、5月9日に第1次隊の今西寿雄、ギャルツェン・ノルブが初登頂。11日には第2次隊の加藤喜一郎と日下田実も登頂した。

マナスル以後のヒマラヤ登山は単一大学の山岳会に引き継がれ、1958(昭和33)年京大のチョゴリザ、60(昭和35)年慶大のヒマルチュリ、京大のノシャック、同志社大のアピ、62(昭和37)年北大のチャムラン、京大のサルトロ・カンリ、63(昭和38)年同志社大のサイバルなどの初登頂を成す。

当時は、厳しい外貨割当の制限があり、海外の山に行くことは実に至難の業であった。ヒマラヤ登山の外貨は、スポーツ外貨枠か学術研究枠などしかなかった。ヒマラヤへ行くには、まずこの外貨獲得が最大の難関であり、「日本を出れば9割成功」と言わしめた所以である。当時、日本体育協会(現日本スポーツ協会)から登山隊に割当てられた外貨は1万ドル程度であったから、その争奪戦は熾烈を極めた。その上、この外貨の運用は日本山岳会が差配していて日本山岳会員以外は使えなかった。

1959(昭和34)年になってようやく文部省(当時)が大蔵省(当時)と協議して、全日本山岳連盟(全岳連)にも年1隊の登山隊に外貨を割当ててくれ、全岳連加盟団体にもヒマラヤの道が開かれた。全岳連では「海外登山審議会」を設置して、割当外貨を公正に運用し

て、その第1号外貨は福岡大学ヒマラヤ探査隊（ガウリシャンカール、メンルンツェ偵察）に与えられた。

1958（昭和33）年には深田久弥らが「ヒマラヤ30万円説」の遠征をジュガル・ヒマラヤで実践し、社会人登山者にもヒマラヤの夢を与えてくれた。全岳連では1960（昭和35）年～62年にかけてビッグ・ホワイト・ピーク（レンボ・ガン）に挑み、1962（昭和37）年、高橋照の率いる第3次隊が初登頂を成す。

戦後、ヒマラヤを巡る政治情勢が大きく変化する中で、8,000m峰への新たな道が開かれると各国が国の威信をかけてジャイアント（巨峰）の初登頂を競った。50（昭和25）年のアンナプルナI峰（フランス隊）を皮切りに、53（昭和28）年、エベレスト（英国隊）、ナンガ・パルバット（ドイツ隊）、54（昭和29）年、K2（イタリア隊）、チョー・オユー（オーストリア隊）、55（昭和30）年、カンチェンジュンガ（英国隊）、マカルー（フランス隊）、56（昭和31）年、マナスル（日本隊）、ローツェ（スイス隊）、ガッシャーブルムII峰（オーストリア隊）、57（昭和32）年、ブロード・ピーク（オーストリア隊）、58（昭和33）年、ガッシャーブルムI峰（アメリカ隊）、60（昭和35）年、ダウラギリI峰（スイス隊）と続き、64（昭和39）年にシシャパンマ（中国隊）が登られてヒマラヤ・オリンピックと称される時代は終焉する。

1964（昭和39）年、海外渡航が自由化されると多くの登山隊が、堰を切ったようにヒマラヤへ繰り出した。然し、皮肉なことに海外渡航が自由化された翌年3月、ネパール政府は突然ネパール・ヒマラヤの登山禁止を発表した。中印紛争、外国登山隊による越境問題等による禁止措置であった。

これによって登山者の矛先は、アルプスやアラスカ、アンデス、ヒンズークシュなどに向けざるを得なくなった。

大学山岳部系の登山者がヒマラヤへ目を向けたのに対して、国内の岩と氷で腕を磨いた社会人系クライマーは、アルプスの岩壁を目指した。1963（昭和38）年の芳野満彦、大倉大八によるアイガー北壁挑戦を皮切りに、65（昭和40）年には多くのクライマーがアルプス三大北壁に殺到。マッターホルン、アイガーが登られ、66（昭和41）年にはグランド・ジョラス北壁も登られた。67（昭和42）年2月には山学同志会の小西政継らがマッターホルン北壁冬季第3登に成功。それから10年後、長谷川恒男は、マッターホルン（77年）、アイガー（78年）、グランド・ジョラス（79年）と三大北壁の冬季単独初登攀に成功、冬季単独三冠王となる。

ネパール・ヒマラヤは、1969（昭和44）年から再解禁され、大阪万博が開催された1970（昭和45）年

には日本隊によるエベレスト登頂が果たされ、第2次ヒマラヤン・ブームが到来する。

70年代に入るとヒマラヤではより困難を求めて巨峰のヴァリエーション・ルート時代（鉄の時代）を迎える。1970（昭和45）年アンナプルナI峰南壁（英国隊）、ナンガ・パルバット南壁（ドイツ隊）、71（昭和46）年マカルー西稜（フランス隊）、マナスル北西稜（日本隊）、72（昭和47）年マナスル南西壁（オーストリア隊）などが登られる。69（昭和44）年の再解禁から衆目を集めたエベレスト南西壁は幾多の登山隊を退けていたが、75（昭和50）年秋C.ボニントンの率いる英国隊によって陥落した。同じ頃、マカルー南壁もユーゴ隊によって登られた。翌76（昭和51）年にはナンガ・パルバット南西稜がオーストリア隊によって初登攀され、79（昭和54）年にはユーゴ隊がエベレスト西稜をロー・ラからダイレクトに登った。

この時期は、1974（昭和49）年にパキスタンのカラコルム、79（昭和54）年秋にインド・ガルワールのガンゴトリ、80（昭和55）年に中国領ヒマラヤ、83（昭和58）年にブータン・ヒマラヤ、84（昭和59）年に東部カラコルムなどが相次いでオープンされ、それまで政治的理由で入域できなかった山々が開放された。その為、「鉄の時代」に逆行するかのような7,000m峰の初登頂ラッシュも迎えた。特に驚異的な高度経済成長の後押しもあって、日本隊が諸外国隊を席卷した。因みに70年～90年代の20年間で日本隊の7,000m峰初登頂は61座を数える。

1974（昭和49）年、日本女性隊がマナスルに挑み、内田昌子、中世古直子、森美枝子が日本女性初の8,000m峰サミッターの栄光を手に入れた。翌75（昭和50）年春には田部井淳子がエベレストの女性初登頂者となる。

一方、70年代はビッグ・ウォール登山と無酸素登山、アルパイン・スタイルの登山も台頭する。

1971（昭和46）年のサラグラール西壁（静岡登攀クラブ）、73（昭和48）年ヒリシャンカ南東壁（東京露草登高会）、76（昭和51）年チャンガバン南西壁（グループ・ド・コルデ他）、ジャヌー北壁（山学同志会）、ワンドイ南峰南壁・チャクララフ東峰南壁・イエルパハー北西壁（岡山クライマースクラブ）、79（昭和54）年ラトックI峰南壁（京都カラコラムクラブ）、同III峰南東壁（広島山の会）などが登られた。

1975（昭和50）年にラインホルト・メスナーとペーター・ハーベラーのペアがアルプスを登るようなスタイルで一気呵成にガッシャーブルムI峰に登り、極地（包囲）法が主流だったヒマラヤ登山に新風を吹き込んだ。

次いでこのペアは、78（昭和53）年5月にエベレ

ストの無酸素登頂を果たし、無酸素登頂を不可能視した高所医学の神話を破った。

メスナーは、さらに80(昭和55)年にエベレストを単独、無酸素、アルパイン・スタイルで登頂に成功。日本人では禿博信が81(昭和56)年5月、ダウラギリI峰(北東コルまでシェルパ同行)を単独無酸素登頂。禿は翌82(昭和57)年K2, 83(昭和58)年エベレストと無酸素登頂するが、エベレスト頂上からの帰途墜死する。96(平成8)年には戸高雅史がK2を単独無酸素登頂する。

世界5位のマカルー(8,463m)より高い山は、全て初登頂時には酸素を使って登られていたが、70年代後半には全て無酸素で登られた。日本人で初めて8,000m峰に無酸素登頂したのは、80(昭和55)年カンチェンジュンガ北壁(山学同志会)で、82(昭和57)年には日本山岳協会隊がK2北稜に、83(昭和58)年秋にはイエティ同人隊と山学同志会隊がエベレストに無酸素で登っている。

また、80年代になるとヒマラヤの冬季登山時代が到来する。1980(昭和55)年2月、ポーランド隊はエベレストの冬季登頂に成功する。以後、ポーランドの登山家たちは精力的に冬のヒマラヤを狙い、84(昭和59)年から88年(昭和63)年にかけてマナスル、ダウラギリI峰、チョー・オユー、カンチェンジュンガ、アンナプルナ、ローツェに成功。日本隊も82(昭和57)年北大隊がダウラギリI峰、83(昭和58)年カモシカ同人隊がエベレスト、85(昭和60)年には山田昇、斉藤安平のペアがマナスル、87(昭和62)年には八木原罔明の率いる群馬県山岳連盟隊がアンナプルナI峰南壁を冬季初登攀し、同隊は引き続き93(平成5)年エベレスト南西壁の冬季初登攀に成功する。

1980年代には8,000m峰を舞台に縦走も行われた。1984(昭和59)年には、日本山岳会隊(鹿野勝彦隊長)のカンチェンジュンガ南峰～中央峰、W.クルティカとJ.ククチカのポーランド最強コンビがブロード・ピーク北峰～中央峰～主峰の三山縦走、E.ロレタンとN.ヨースのスイス・ペアがアンナプルナI東峰～中央峰～主峰の大縦走を果たす。そして1989(平成元)年にはE.ミスフスキーの率いる旧ソ連隊がカンチェンジュンガ西峰～主峰～中央峰～南峰の交差縦走を完結する。

1990年代に入ると隆盛を誇った日本人の海外登山も、バブル経済の破綻と共に激減した。プラザ合意による円高はあっけなく終焉を迎え、1990(平成2)年3月に金融の総量規制が導入されると日本経済は一気に冷え込んだ。さらに小泉内閣で改正された非正規雇用労働者の現業解禁も拍車をかけ、日本人若者のヒマラヤの夢は奪われていった。

一方では、ヒマラヤのトレッキングはもとより高峰登山まで旅行業者が絡む旅行の対象となり、ロブ・ホールらの商業主義的登山隊がエベレストなどの8,000m峰登山を手掛けるようになる。お金持ちの高所遠足登山が普及し、エベレストに女性タレントが登頂したり、1日に200人も登頂するような時代を迎えるようになった。1996(平成8)年5月、ロブ・ホールの公募隊はエベレスト登頂を目指したが、登頂後、難波康子ら2人の顧客と助手のガイド、そして彼自身も生還できない悲劇が起こり、公募隊の在り方に警鐘を鳴らした。

こうした商業主義がはびこるヒマラヤ登山にあって、山野井泰史のようなフリークライミング全盛時に育った新たなタイプのアルパイン・クライマーは、ヨセミテ、アルプス、バフィン島などで困難なソロ・クライミングを実践した後、ヒマラヤへ向かい、94(平成6)年チョー・オユー南西壁新ルートを1ピヴァーク単独登頂、2000(平成12)年K2南東リブ単独無酸素登頂、02(平成14)年ギャチュン・カン北壁第2登などに輝かしい記録を遺した。

山田昇、名塚秀二、田辺治らが果たせなかった日本人初の8,000m峰14座登頂は、2012(平成24)年に竹内洋岳によって達成された。

近年の傾向は、以前のような長期間をかけたピーク・ハントの登山ではなく、休暇の範囲内で行ける期間で、ハード・クライムを楽しむ先鋭的なスーパー・アルピニズムが6,000m～7,000m峰で展開されている。2009(平成21)年に日本人として初めて「ピオレドール」を受賞したカメット南東壁の平出和也、カランカ北壁の天野和明、佐藤裕介をはじめ馬目弘仁、横山勝丘、花谷泰広、岡田康、長門敬明、増本亮、宮城公博、鳴海玄希、青木達哉ら錚々たる先鋭クライマーが新たな課題を求め独創的な登攀を継続している。

## 8 スポーツクライミングの変遷

スポーツクライミングは、自然の岩場での冒険的な挑戦にそのルーツを持ち、身体的な可能性を追求していく過程で、「競技としてのスポーツクライミング」が確立された。その歴史は新しく、1960年代に遡る。この時代にアメリカでクリーン・クライミングが提唱され、やがて1970年代に入るとハード・フリークライミングの波が起こってきた。そのブームは日本にも伝播し、既存の人工登攀ルートのフリー化が行われるようになっていった。

1979(昭和54)年、ヨセミテを訪れた戸田直樹は、当地で受けたフリークライミングの理念・技術を日本に持ち帰った。翌80(昭和55)年5月、戸田らは谷川岳一ノ倉沢コップ状正面壁雲表ルートをフリー化。

これを契機にフリークライミングのブームが始まった。82（昭和57）年8月には、不可能視されていた一ノ倉沢衝立岩正面壁も池田功らによってフリー化される。

一方では旧ソ連邦を中心に誰が一番早く登れるかを競うスピードの岩登り競技会が行われていた。1976（昭和51）年、旧ソ連西カフカスで旧ソ連アルピニズム連盟主催の国際岩登り競技会が行われ、日本から山学同志会の今野和義と大宮求が参加。結果は旧ソ連選手の圧勝に終わったが、この大会に触発され、日本でも岩登り競技会が行われるようになる。

1977（昭和52）年に宝剣岳天狗岩で第1回登攀技術研究会と称した岩登り競技会が開催された。その後、1988（昭和63）年には第2回ジャパンカップが静岡市のツイン・コアピルの外壁に人口ホールドを設置して開催され、これが国内初のスポーツクライミング競技大会となった。

1989（平成元）年からワールドカップ・シリーズがスタート。

1991（平成3）年にはアジアで初めてのワールドカップ大会を東京・代々木競技場で開催。その中で平山ユージは飛び抜けた実力を発揮して優勝。98（平成10）年にはワールドカップ・シリーズを制覇してついに世界チャンピオンに輝く。平山は、クライミング・コンペのみならず97（平成9）年秋にはヨセミテのエル・キャピタンのサテラ・ウォールをグランド・アップによるオールフリーに成功し、世界初の快挙を成す。

1991（平成3）年には世界選手権が開催され、翌92（平成4）年には世界ユース選手権も行われるようになる。その後、ワールドカップも徐々に拡大し、参加国や大会数も増え、98（平成10）年からはボルダリングも加わり、より充実したシリーズとなった。

一方、90年代になると大都市周辺では室内に人工壁を設けたクライミング・ジムが相次いで誕生。フリークライミングは、クライミングの本筋を冒険からスポーツへ、大衆化へと移行した。

こうした中、2007（平成19）年に国際山岳連（UIAA）で10数年にわたりワールドカップを主催してきた国際クライミング協議会（ICC）が国際スポーツクライミング連盟（IFSC）として分派独立し、2010（平成22）年2月に国際オリンピック委員会（IOC）加盟となる。

2014（平成26）年12月にモナコで開催されたIOC総会で、トーマス・バッハ IOC 会長は、中長期改革「オリンピック・アジェンダ2020 20 + 20 提言」を提案した。アジェンダでは、夏季五輪競技種目28の上限を撤廃して、開催都市のオリンピック組織委員会が競技種目を追加提案することができる、とされた。

これを受けて2015（平成27）年5月、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会では、33の非五輪競技団体に応募用紙を発送し、応募のあった26競技から8競技に絞りこんだ。

スポーツクライミングは「アーバンスポーツの代表格。これまでの五輪競技にはなかった垂直方向の競技パフォーマンスがユニークな新しい価値をもたらす」として評価された。最終的に5競技18種目がIOCへ提案され、2016（平成28）年8月、リオデジャネイロで開催された第129回IOC総会で、一括承認された。

追加種目となったスポーツクライミング競技は、メダルの数（種目）は、男子・女子各1の計2種目。選手数は、男子・女子各20人の計40人。競技の内容は、リード、ボルダリング、スピードの3種目複合で行われる。

## 9 山岳文学

日本の山岳文化は、そのはじめは口から口に伝えられ、口誦伝承の神話・伝説等が文書の形態に記されるようになったのは大陸から文字が移入されてからのことで『古事記』や『日本書紀』に地誌が記され、山が位置づけられてからである。その後、今日に至るまで、日本の山岳文化は、長い年月を経つつ伝統を形成してきた。

明治維新によって海外の文化が自由に摂取できるようになると、欧米の熟成した近代文化が潮のごとく流入してきて、日本の山岳文化も大きな影響を受けた。

明治20年代になると日本文学にロマン主義が台頭する。文明開化が進んで合理的思考や生活の利便を得た人々が、一方で自然への憧れを抱き、地方に残る美しい山水を放浪して自然に触れた体験、旅の情緒を筆に託す文学者の紀行に、人々は吸い寄せられ、社会に自然志向機運が高まる。北村透谷、田山花袋、山田美妙、久保天随、幸田露伴らの文学者が山水紀行を発表。

一方、『日本風景論』（志賀重昂、1894年刊）や『日本アルプス・登山と探検』（W. ウェストン、1896年刊）の名著は、日本の近代登山に大きな影響を与えた。

明治末期から大正初期には、チベットやアルプス紀行が紹介されるようになる。1904（明治37）年、『西藏旅行記』（河口慧海）が刊行。1910（明治43）年、加賀正太郎のユングフラウ横断紀行が『山岳』に発表。翌11（明治44）年、鹿子木員信はベルナー・オーバーランドを中心とする旅をし、その紀行を纏めた『アルペン行』（1914年刊）は、アルプスについての最初の単行本である。鹿子木は、1919（大正8）年のシッキム・ヒマラヤ紀行を纏めた『ヒマラヤ行』（1920年刊）も著す。1914（大正3）年、辻村伊助は、ユングフラウやメンヒに登り、その紀行を『スイス日記』（1930

年刊),『ハイランド』(1930年刊)として纏め、本場アルプスの美しさを見事な筆の力で日本に紹介した。

榎有恒はアルプスから帰朝後、『山行』(1923年刊)を上梓。榎の薫陶を受けた大島亮吉は、『山・研究と随想』(1930年刊)、板倉勝宣は『山と雪の日記』(1930年刊)、松方三郎は『アルプス記』(1937年刊)を著す。

日本独特の渓谷廻行や奥秩父の深林と渓谷に見る山岳美については、冠松次郎の『黒部谿谷』(1928年刊)や田部重治の『日本アルプスと秩父巡禮』(1919年刊)、木暮理太郎の『山の憶い出』(上巻1938年、下巻1939年刊)などの名著がある。

古くから、文人には山水に親しむ風が強い。大正期には本格的な登山や縦走を楽しむ文人も現れ、『日本山水紀行』(1927年刊)を著した大町桂月のような紀行作家も登場した。

昭和に入ると山岳雑誌『山と渓谷』が創刊(1930年刊)され、相次いで『山と旅』、『山小屋』、『ハイキング』などが発刊された。この時代には、低山趣味の提唱と登山知識の涵養書として『霧の旅』(松井幹雄、1934年刊)。北海道の山を巡る紀行・随想集の『北の山』(伊藤秀五郎、1935年刊)。微妙な雰囲気醸し出す画文集の傑作、『霧の山稜』(加藤泰三、1941年刊)なども出版された。

孤高の登山家として単独登山主義を貫いた加藤文太郎の『単独行』(1956年刊)、これほど版を重ね、多くの人に愛読された山の本もない。

終戦後文壇の注目を浴びた山岳小説は、橋本英吉の『富士山頂』(1948年刊)だ。冬富士山での気象観測にあたる野中至夫妻の感動物語。井上靖の『氷壁』(1957年刊)は、ロープ切断事件をテーマにした小説。新田次郎の『強力伝』(1956年刊)は、三つの短編小説をまとめた直木賞受賞作品である。

日本人の海外登山に関しては、明治時代からマナスル登山まで判り易く纏めたのが、徳岡孝夫の『ヒマラヤ 日本人の記録』(1964年刊)。マナスル以降の日本人の記録については、『日本ヒマラヤ登山通史』(山森欣一、2018年刊)や『現代ヒマラヤ登攀史』(池田常道、2015年刊)が必読。

昭和初期にヒマラヤを夢見た日本人がバイブルとしたのは、『ヒマラヤに挑戦して』(P.バウアー、伊藤愿訳、1931年刊)。日本人初のヒマラヤ登山の記録は、『ナンダ・コット登攀』(竹節作太、1937年刊)がある。

海外渡航が自由化し、日本人のアルプス詣でがはじまると、先ず古典ものでは『アルプス登攀記』(E.ウィンパー、浦松佐美太郎訳、1936年刊)や『アルプス及コーカサス登攀記』(A.F.マンメリー、石一郎訳、1938年刊)。そして『アルプス三つの壁』(A.ヘックマイヤー、安川茂雄訳、1966年刊)、『白い蜘蛛』(H.ハー

ラー、横川文雄訳、1966年刊)、『星と嵐』(G.レビューファー、近藤等訳、1955年刊)、『無償の征服者』(L.トレイ、横川文雄/大森久雄訳、1966年刊)『わが山々へ』(W.ボナッティ、近藤等訳、1966年刊)などのアルプス登攀記が影響を及ぼした。

第2次ヒマラヤン・ブームが到来すると『処女峰アンナプルナ』(M.エルゾーク、近藤等訳、1953年刊)、『ナンガ・パルバット』(ヘルリヒコフファー編、横川文雄訳、1954年刊)、『八千米上と下』(H.ブール、横川文雄訳、1963年刊)、『エヴェレスト登頂』(J.ハント、朝日新聞社訳、1954年刊)、『マカルー全員登頂』(J.フランコ、近藤等訳、1956年刊)、『マナスル登頂記』(榎有恒、1956年刊)などのヒマラヤ登頂記が愛読された。

ヒマラヤの概念把握には、『ヒマラヤ』(K.メイスン、望月達夫・田部主計共訳1957年刊)、『ヒマラヤの高峰(I~III)』(深田久弥、1973年刊)、『ヒマラヤ名峰事典』(平凡社、1996年刊)などが挙げられる。

登山史を多角的に俯瞰する文献としては、『日本のアルピニズム』(斎藤一男、1965年刊)、『登山百年史』(A.ラン、諏訪多栄三・馬場勝嘉訳、1967年刊)、『日本登山史』(山崎安治、1969年刊)、『近代日本登山史』(安川茂雄、1969年刊)、『日本アルプス山人伝』(安川茂雄、1971年刊)、『岩と人—岩壁登攀史』(斎藤一男、1980年刊)、『日本岳連史—山岳集団50年の歩み—』(高橋定昌、1982年刊)、『目で見ると日本登山史』(山と渓谷社、2005年刊)、『山—その日この人(上・下)』(斎藤一男、2015年刊)などがある。

山岳文化については、『登山の文化史』(桑原武夫、1950年刊)、『日本山岳文学史』(瓜生卓造、1979年刊)、『山の文学散歩』(斎藤一男、2010年刊)などがお薦め。

【以上、人名敬称略】

## 参考文献

- ・『ヒマラヤ』(K・メイスン著、望月達夫・田部主計共訳、1957年、白水社刊)
- ・『ヒマラヤ 日本人の記録』(徳岡孝夫著、1964年、毎日新聞社刊)
- ・『日本のアルピニズム』(斎藤一男著、1965年、朋文堂刊)
- ・『登山百年史』(アーノルド・ラン著、諏訪多栄三・馬場勝嘉訳、1967年、あかね書房刊)
- ・『日本登山史』(山崎安治著、1969年、白水社刊)
- ・『近代日本登山史』(安川茂雄著、1969年、あかね書房刊)
- ・『ヒマラヤの高峰I~III』(深田久弥著、1973年、白水社刊)
- ・『岩と人—岩壁登攀史』(斎藤一男著、1980年、東京新聞出版局刊)

- ・『日本岳連史—山岳集団50年の歩み—』(高橋定昌著, 1982年, 出版科学総合研究所刊)
- ・『目で見る日本登山史』(山と溪谷社刊, 2005年)
- ・『日本山岳会百年史』(日本山岳会刊, 2007年)
- ・『山の文学散歩』(斎藤一男著, 2010年, 日本山岳文化学会刊)

(尾形好雄)

